



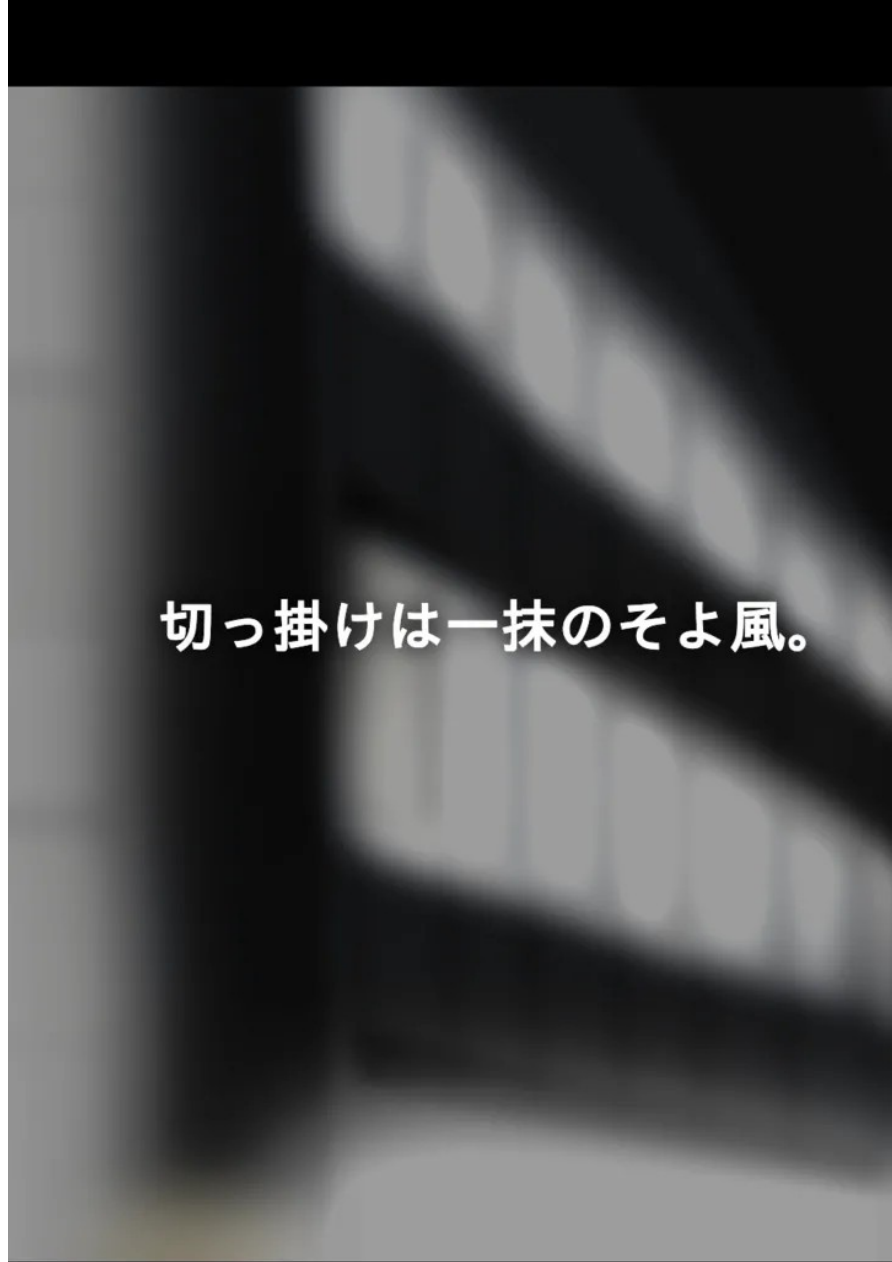
これは夢か幻か。
独りの秀才の過去の事。

もう何年も前の
昼が夕に夕が夜になる季節。

誰もいない図書室の一室
その狭間。

息殺し眺めた、あの光景は
今でも、この秀才を狂気の沙汰へ誘う。





切っ掛けは一抹のそよ風。



そのそよ風が
雲が最も近いこの場所に
故郷の香を届けた。

そこから、秀才は責務を横に
郷愁そのまま
かつての故郷を思い出し…



「ヒーローになれたな」
そう上京前の目標を笑い、
故郷に錦を飾ろうかと思う
その時…



この秀才は—



「弱くてもいいんだよ」



彼女を思い出す。

故に、彼はゆく。
忘れたはずの
あの場所にまた戻る。



失ったことを知ったあの日、
憎悪と喪失感と共に
狭間から傀儡の彼女を眺める。



始めてみた
男と女の情事。

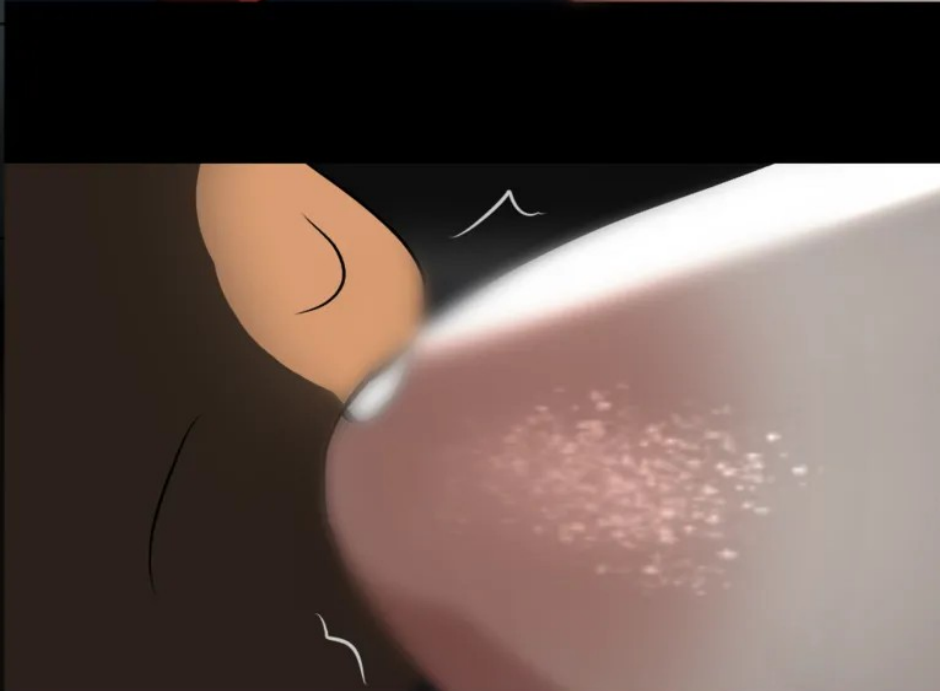
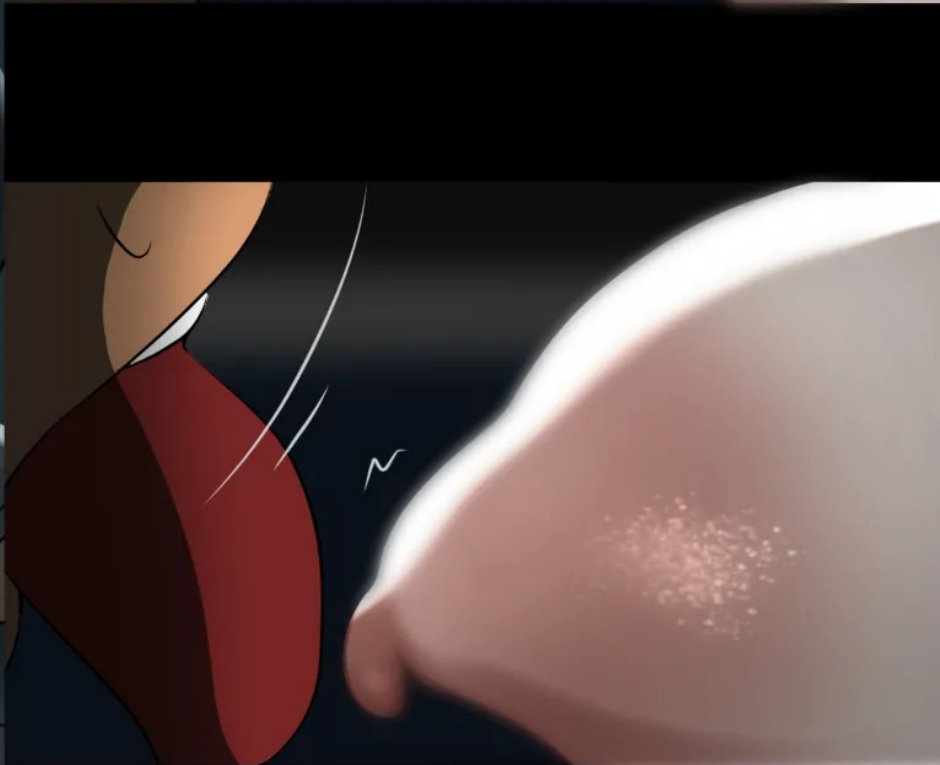
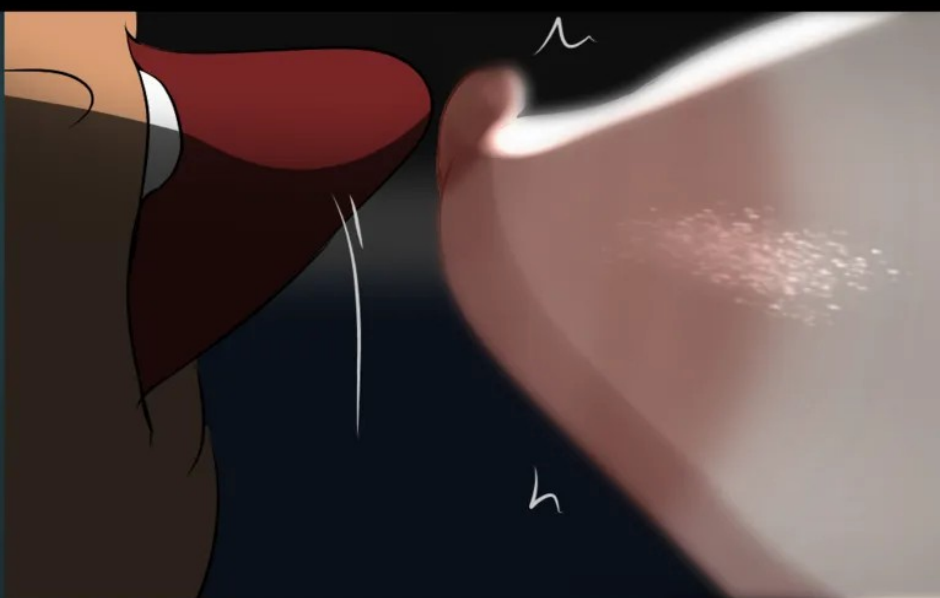
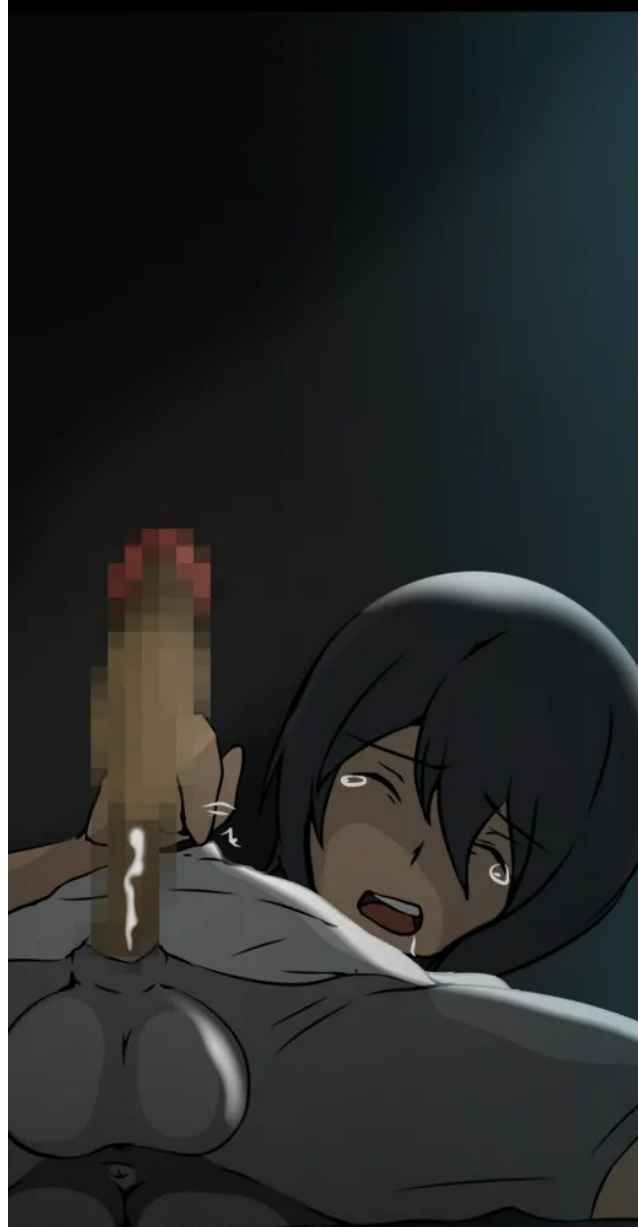


その場所で、秀才は狂気退行。



その姿は、
普段の端麗と冷静さは微塵もなく。





子供のように
泣き喚めいては
自分を守るために
憎悪を投げつけて…



彼らの劣位と
自らの優位を比べて
罵倒して叫ぶ。





でも、それも長くは続かない。
すぐに、許しと後悔に変わる。



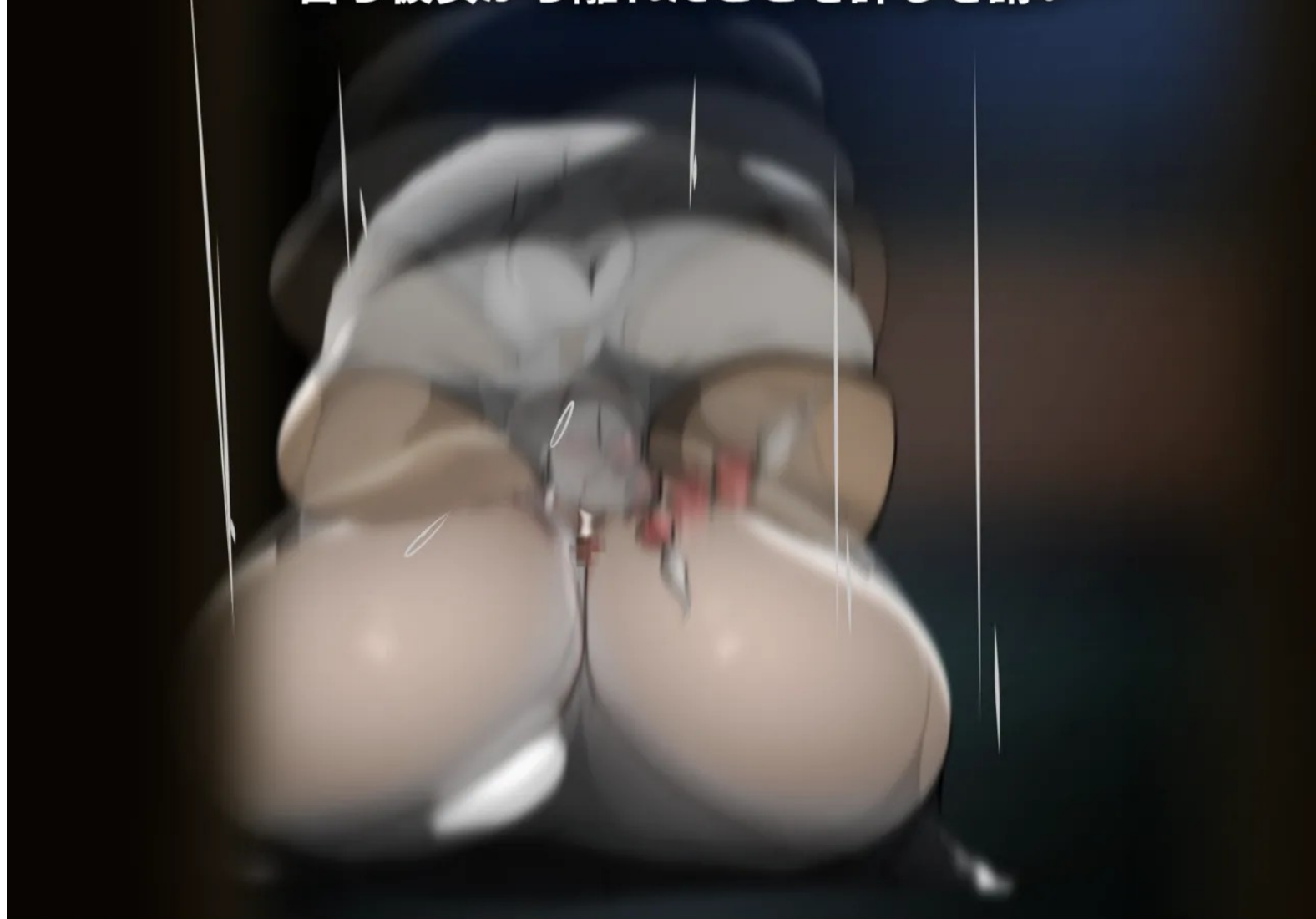


「ヒーローになりたかったんだっ!」
「チャホヤされて調子に乗ったっ!」





自惚れと傲慢。
華やかな自分と地味な彼女を比べ
値踏みし、外聞を恐れ
自ら彼女から離れたことを許しを請い…





傍にいて欲しい、もう強さはいらない。
それでも、彼女がいれば
後悔はないと真心から切に願うが…





答えは返ってこない。



これは幻、過去のこと。
後悔は先に立たず
故郷の風はもう吹かず…



ただ郷愁と彼女への恋慕を
そのままに…



秀才は、もがいて
泣きつかれて眠るまで…





最後見た彼女と見つめ合い。
あのそよ風に乗って、
想いが届くよう願い続ける。

ボツ



ボツ



ボツ



ボツ



ボツ

